

「リーディングス アジアの家族と親密圏」刊行にあたって

「アジアの家族と親密圏」プロジェクトが収集した各国の著作のうち、日本の読者にとってとりわけ関心が高いと思われる作品を精選し、これらのアジアの作品との比較対照の意義が大きいと思われる日本の著作を新たに加えて、日本語版「リーディングス アジアの家族と親密圏」を刊行することとした。英語版 *Asian Families and Intimacies* (2021, Sage) には含まれなかったが日本語版には収録した作品も少なくない。

アジアにおける研究と思索の成果を日本の読者が直接に読めるようにすること、当たり前手にできるものにするのが、日本語版出版の第一の目的であるのは言うまでもない。それと同時に、日本の研究や思索をアジアの文脈に置きなおしてみたとき、どのような新しい日本像が見えてくるのか、読者と共に再考したいという思いがある。

いま世界の秩序は急速に転換している。世界における知の生産様式も転換せざるをえない。世界秩序の転換によりナショナル・アイデンティティが揺らぎ、方向性を見失っている感のある現在の日本が新たな自己像と世界像を見出すためには、アジアの隣人たちと共に考えることから再出発するしかないのではないだろうか。

これまでの、そしてこれからの日本、アジアや世界について、アジアの隣人たちと共に考える、そのような企てとして、本シリーズを読んでいただけたらありがたい。

日本語版出版にあたっては、グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」およびその成果として設立した京都大学アジア研究教育ユニット(KUASU)と京都大学文学研究科アジア親密圏／公共圏教育研究センター(ARCIP)の代々の研究員等が翻訳とその推敲にあたり、アジア諸地域の専門家から成る日本語版編集委員会がさらに

訳文を検討するという、何重にもわたるチェック体制を設けた。翻訳者として複数のお名前が並ぶ章があるのはそのためである。どの段階で追加された注釈も「訳注」として一括してあることを申し添えておく。

また、日本語版編集委員以外にも、多くの専門家の先生方にご助言、ご支援を賜った。とりわけお手間をおかけした桃木至朗先生（大阪大学名誉教授）、速水洋子先生（京都大学）、小泉順子先生（京都大学）、岡真理先生（京都大学）、東長靖先生（京都大学）、関泰子先生（四国学院大学）、濱田麻矢先生（神戸大学）、西澤希久男先生（関西大学）、パトリック・ジョリイ先生（クイーンズランド大学）、後藤絵美先生（東京外国語大学）、中島満大さん（明治大学）、崔金瑛さん（梨花女子大学）には、お名前をあげて感謝申し上げます。

出版社の有斐閣には、この大がかりで困難の多い企画をお引き受けいただき、日の目を見せていただいたことに深く感謝している。とりわけ編集者の松井智恵子さん、藤澤秀彰さんには並々ならぬご苦労をおかけした。

また、やまもさんが描いてくださったカラフルでユーモラスで意味深なカバアの絵が、トンネルの出口の光のように、延々と続く作業に励む私たちを元気づけてくださったことも特筆しておきたい。

最後になるが、グローバルCOE以来、長年にわたる国際共同プロジェクトを資金面で支えてくださった文部科学省、日本学術振興会にお礼を申し上げるとともに、本書が納税者の方々へのささやかなご恩返しとなるよう願っている。

二〇二一年二月

編者 落合恵美子

森本 一彦

平井 晶子

日本語版編集委員会

押川文子（京都大学名誉教授）／落合恵美子（京都大学）／加藤敦典（京都産業大学）／小林和美（大阪教育大学）／白石華子（京都大学）／陳玲（華中科技大学）／中谷文美（岡山大学）／長坂格（広島大学）／平井晶子（神戸大学）／森本一彦（高野山大学）

*五十音順

目次

「アジアの家族と親密圏」刊行の趣旨 i

「リーディングス アジアの家族と親密圏」刊行にあたって v

序論 アジアの重層的多様性——セクシュアリティとジェンダーから見る

落合恵美子

1

第I部 セクシュアリティ——二つのアジアと一つの近代

I-1 二つのアジア

第1章 カーマストラを解読する

クムクム・ロイ

(インド)

32

第2章 朝鮮後期における妾と家族秩序——家父長制と女性のヒエラルキー

チヨン・ジヨン

(韓国)

51

第3章 タイの性愛文化におけるヨバイの伝統——忘れ去るべき情事

カモンテ IPP・チャーンカモン

(タイ)

68

第4章 百歳女性のライフヒストリー——九州海村の恋と生活

落合恵美子

(日本)

76

I-2 性と愛の近代

第5章 性と愛をめぐる論争

折井美耶子

(日本)

114

第6章 植民地朝鮮における新女性、セクシュアリティ、恋愛

キム・キョンイル

(韓国)

132

第7章 「爆弾」としての婚外性交渉——「マスターベーション」の歴史から「性科学」へ

タネート・ウオンヤナワー

(タイ)

150

I-3 セクシュアリティの現在

第8章 レイプ・懲罰・国家——誰の身体に？

(インド)

プラティクシャ・バクシ

第9章 男性ピンナップ、GRO、マツチヨ・ダンサー——グローバル化時代の男性性の見せ方

(フィリピン)

ロランド・B・トレンティーン

第10章 北京におけるゲイ・コミュニティの実態調査

(中国)

李銀河

第II部 ジェンダー——葛藤と実践

II-1 伝統の重層性

第11章 仮面と素顔——パンジャーブの親族関係についての考察

(インド)

ヴィーナ・ダス

第12章 「男性の概念」とは何か——名誉殺人における「名誉」

(インド)

ブレイム・チョウドリ

第13章 女性・神学・暴力

シテイ・ムスタ・ムリア

(インドネシア)

260

第14章 江戸時代は女性にとって暗黒の時代か

高木侃

(日本)

276

II-2 近代的性役割の成立と変容

第15章 良妻賢母思想の成立

小山静子

(日本)

291

第16章 アメリカ植民地教育はフィリピン女性の地位をどう変えたか

カロリン・イスラエル・ソブリチア

(フィリピン)

319

第17章 男性性を作り直す——出稼ぎ妻と専業主夫の家族におけるアイデンティティ・権力・

ジェンダーのダイナミクス

(フィリピン)

341

アリシア・タデオ・ピンゴール

第18章 最後の伝統的な姑？

馬笑冬

(中国)

362

第19章 女にとって産むこと産まぬこと

江原由美子

(日本)

383

第20章 韓国家族法における男女平等対「伝統」——ポストコロニアル・フェミニズム法学

ヤン・ヒョンア

(韓国)

390

第21章 語られない秘密——インドネシアのレズビアン運動

R・r スリ・アグステイニ

(インドネシア)

416

第22章 「被害者化」を超えて——資本主義的グローバル化に抗う「外国人花嫁」のエンパワメント

夏曉鶯

(台湾)

429

編者・著者紹介

455

序論

アジアの重層的多様性——セクシュアリティとジェンダーから見る

落合恵美子

★「グローバルな知の生産様式」を変える

本書の冒頭を飾る「カーマストラ」の名を聞いたことがない人は少ないだろう。「性愛の技術」を伝授するインドの古典としてグローバルに知られてきた。日本でも「カーマストラ」と聞くとにんまりする向きもあり、「カーマ」をブランド名にするインドの化粧品メーカーもある。

しかしインドの歴史学者クムクム・ロイは「カーマストラを解説する」（本書第1章）の中で、「カーマストラ」とはインド社会のヒエラルキーによって徹底的に秩序づけられた性規範とその実践を成文化した書であるとする。性の主体となるのは裕福かつ教養のある男性市民であり、すべての女性と下層男性はその性欲に従属すべきだということである。男性が女性を殴ることは性交の一部として正当化されており、それに対して女性が金切り声をあげて抗議しても、それはゲームの中で女性に期待される行為とみなされてしまう。「性愛の技術」に関する図解入りの章は、こうした全体の一部でしかない。このテキストが一九世紀初めに西洋に知られるや否や「愛の書物」としてもはやされるようになったのは、「ビクトリア朝的セクシュアリティの偽善」への批判から「性愛の技術」が肥大化して取り上げられたのに加え、当時の

ヨーロッパ社会の家父長制的価値観に暗黙に通じるところがあったからではないかと、クムタム・ロイは読み解く。アジアのセクシュアリティを論じるとき、当の社会の人々の視線と西洋からの視線が往々にしてすれ違い、また時には共犯関係のように絡み合つて、グローバルに流布する言説を生み出してきたことを示す好例といえよう。

セクシュアリティばかりではない。アジアあるいはもっと一般的には非西洋圏の地域に関する言説は、いったん西洋圏を経由して世界の他の地域に届けられるという、「近代の知の生産様式」ともいうべき構造ができあがっている。このような知の生産のあり方は、非西洋圏で起きている事象について「オリエンタリズム」的な歪んだ像を生み出すばかりでなく、西洋圏の人々の関心を引かない事柄はそもそも視野の外におかれるという、視野そのものの根本的な歪みをもたらす。「アジアの家族と親密圏」と題する本シリーズのもととなったプロジェクトは、このような問題意識から出発した。隣国に生きる人たちが何に関心をもち、それについてどのように思考しているのかを直接に知りたい。お互いに知らぬまま、同じような問題に直面しているなら、それぞれの社会の知の道具箱に詰め込まれたさまざまな起源をもつ概念を駆使して問題解決のための思考を編み出そうとするさまを学び合いたい。少し大げさに言えば、「グローバルな知の生産様式」を変えたい。そのための一歩として貢献しようという思いから、本プロジェクトは企画された。

★初めての会議の興奮

このプロジェクトは、正確にいうと、二〇〇九年の一月、京都大学の社会学共同研究室の片隅で始まった。移動式のデスクと椅子で小さな輪を作り、タイ、韓国、ベトナムと日本の家族研究者数人が集まった。発足したばかりの京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の国際共同研究として、アジア各国の「家族と親密圏」に関する主要な研究成果を共有するプロジェクトを立ち上げられないかと、COEの責任者として、また一人の研究者としての筆者の念願を聞いてもらうため、国際学生ワークショップの後に時間をとってもらったのだった。それぞれの国での「家族と親密圏」についての研究状況を報告し合うことにしていたが、言い出した責任で日本から始めるように言われ、

日本の家族史研究、ジェンダー史研究の特筆すべき成果を順不同で紹介していった。徳川時代の日本の離婚率は現在のアメリカ合衆国並みに高かったこと。離婚は男性が一方的に言い渡すものだったと考えられてきたが、高木侃の研究（本書第14章）により女性や女性の家族が主導したケースも少なくないとわかったこと。離婚後三年くらいまでの間に男も女もだいたい再婚したこと。娘の夫を婿養子にして女性側の家の跡取りにするケースが徳川時代の結婚の五分の一くらいはあったこと。

このあたりまで話しただけで、聞き手の目が輝き、身を乗り出してくるのがわかった。離婚や再婚はタブーではなかったのかと韓国の研究者が尋ねた。儒教では「二夫にまみえる」再婚はタブーなのに気にしなかったのかと。日本では儒教倫理は庶民の日常生活にほとんど浸透しなかったと説明すると、同じ儒教圏だと思っていたのにと、韓国とベトナムの研究者が顔を見合わせた。「同姓不婚」（同じ姓の男女は結婚しない）と「異姓不養」（異なる姓の者は養子にしない）という原則を踏まえれば成り立ちようのない「婿養子」が日本では当たり前だったことにもびつくりされた。

ベトナムあたりまで含め、東アジアは「儒教文明圏」とひとまとめにして認識されることが多い。「儒教資本主義」「儒教福祉国家」というように、現在の東アジア社会の特徴を儒教と結びつけて説明することもある。当の東アジア地域の人々も、お互いの社会についてよく知らぬまま、わかった気になっているが、そんなに簡単ではなさそうだ。

日本の性道徳の「乱倫」ぶりに呆れ顔の東アジア人と対照的に、日本は自分のところと似ていると面白がりだしたのが、タイの研究者だった。婚前もしくは婚外の性交渉を意味する日本の「ヨバイ」について話し始めると、タイにも「ヨバイ」にあたる慣習がある、ただしタイでは上に登る（クンハー）のだと説明を始めた。タイの家屋の構造から、そういうことになるのだという。「ロミオとジュリエット」だってバルコニーに登るだろう、と急にアジアから飛び出して博識ぶりを披露し始めた。

きりがないので最初の会議の様子を紹介はこのあたりにするが、みんながどんなに議論を楽しんだか、想像していただけるだろう。アジア人どうしなのに、しかも家族研究のベテランばかりなのに、お互いのことをこんなに知らない。聞く

ことがみな新鮮で、そういえばこんなことも、と関連の話題が持ち込まれ、また新しいことを知った。せっかく予約していた料理屋をキャンセルして八時過ぎまで話し続け、まだ開いている店に何とかすべり込んで、お腹を満たしながらさらに話し、みんなとても幸せだったのを覚えていいる。この最初の興奮がなければ、それから一三年もの間、プロジェクトを共に続ける力が出なかつたのではないかと思う。

★ 生きている文明圏

さて、セクシユアリティとジェンダーが「アジアの家族と親密圏」プロジェクトの出発点であり、多様なアジア社会を分けては結ぶ要であることを感じ取っていただけだろうか。

その後、プロジェクトの国際編集会議は、ソウル、ハノイ、杭州、そしてまた京都で開かれたが、いつも出席するだけで多くの気づきを得られる場であつた。たとえば、ベトナム語の発音から「土農工商」など共通の語彙を聞き分けた韓国と日本の研究者が指摘して、ベトナムの研究者が驚くなどという場面があつた。ベトナムはすでに漢字を使わなくなつていいるが、共に中国文明の語彙で思考していると実感した瞬間だつた。他方、同じ東南アジアでもタイの研究者はこれらの語彙を共有しておらず、むしろインドの研究者とサンスクリット起源の抽象概念で分かり合うことができるのも目の当たりにした。外見ははるかに東アジア人に近いタイ人の頭の中は、インド人と共通の概念で満たされている。

近代の学術用語は西洋起源のものが多く、近代以前の抽象概念を各社会に与えたのは中国文明、インド文明、イスラム文明などであり、それらはアジアの人々の思考を形づくるものとして現在も機能し続けている。「グローバルな知の生産様式を変える」ことをめざすプロジェクトであつたが、現在の世界も単一の知の生産様式に覆われているわけではないという気づきをまず得ることができた。

しかし、ここで終わればただの文明圏論である。「西洋」を中心とした序列をもつ一つの世界が、それぞれの中心をもついくつかの文明圏の集合に置き換えられるにすぎない。そのような世界観に導かれる未来は「文明の衝突」であろうか。

しかしアジアを分けるのは「文明」だけではない。同じ中国起源の儒教文明圏に属すと思われる日本の性慣習が、韓国とベトナムの人々の眉をひそめさせることが、文明圏論のほころびの何よりの証拠だろう。

★ 親族構造という基層（一）—— 双系的社会

アジア九社会を比較してみても、セクシュアリティとジェンダーに関して日本ともっともよく似ている社会は、最初の会議で気づいたように、タイだと思う。文明圏としては日本とタイは異なるグループに属するにもかかわらず、ということに注意してほしい。

「アジアの家族と親密圏」プロジェクトの英語版の成果である *Asian Families and Intimacies* (Sage 社刊、二〇二二年) のセクシュアリティのセクシオンには、日本からは赤松啓介の『夜這いの民俗学』の一部を収録した。日本民俗学の異端児ながらすでに古典となった赤松の著作には、著者が村々で出会った男たちや女たちの赤裸々でユーモラスな性談義が満載されている。最初の会議でタイの研究者が日本のヨバイに反応し、タイには「クンハー」と呼ばれる慣習があると教えてくれたことはすでに書いた。この「クンハー」については、タイの古典文学の「クンチャー・クンペン物語」を引きながら、カモンティップ・チャーシカモンが「タイの性愛文化におけるヨバイの伝統」（本書第3章）にて紹介している。エロティックで美しい描写に満ちたこの物語は、村人たちが拍子木を叩きながら歌い継いできたという。日本とタイの村人たちが出会ったら、さぞや酒席が盛り上がったのではないだろうか。

では、タイと日本の性規範が緩やかなのはなぜだろうか。この類似性は何によって生み出されているのだろうか。タネート・ウォンヤナワーが「『爆弾』としての婚外性交渉」（本書第7章）の冒頭で述べていることは、この問いに答えるヒントを与えてくれる。タイの農民の間では、結婚した夫婦は妻方の親族とともに住む母方居住制が一般的で、相続は男女両方に均等な双系制がルールだが、タイ貴族では夫婦は夫方の親族とともに住む父方居住制が実践されており、父系制を行っている。だから貴族では男性血統を保証するために厳格な性規範が要請され、処女性が大切にされるが、農民の性規

編者紹介

落合恵美子 (おちあい えみこ)

京都大学文学研究科教授

森本一彦 (もりもと かずひこ)

高野山大学文学部教授

平井晶子 (ひらい しょうこ)

神戸大学人文学研究科教授

セクシュアリティとジェンダー

(リーディングス アジアの家族と親密圏 第3巻)

Sexuality and Gender

(*Readings on Asian Families and Intimate Spheres*, vol. 3)

2022年3月25日 初版第1刷発行

編者 落合恵美子

森本一彦

平井晶子

発行者 江草貞治



発行所 株式会社 有斐閣

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町2-17

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷 大日本法令印刷株式会社 製本 大口製本印刷株式会社

©2022, OCHIAI Emiko, MORIMOTO Kazuhiko, HIRAI Shoko. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-17469-6

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。